

夭折の俳人・攝津幸彦に見る滑稽

川名将義

近年の俳壇は二人の大型俳人を失った。

一人は攝津幸彦（享年49歳）であり、もう一人は田中裕明（享年45歳）である。俳壇の構成年齢を考えると、夭折と言えよう。

その一人攝津幸彦は、昭和49年に当時高柳重信が編集長をしていた、俳句総合誌「俳句研究」の『第二回五十句競作』で第一席を得て、彗星のように俳壇に登場した俳人である。

十七文字の短詩型の中に、平易な言葉があるときはまるで散文のように並べ、「俳」と「諧」の世界、ひいては読者の感性に応じた滑稽の世界を提示した作家である。

ちなみに、俳諧の「諧」である諧謔を広辞苑で引いてみると、

【おもしろい気のきいた言葉。 おどけ。 しゃれ。 滑稽。 ユーモア。】とある。

国家よりワタクシ大事さくらんぼ

初めてこの句に接したときに、まず浮かんだのが、ケータイにしがみついているばかりで、日本語もまともに話せない、今どきの若い女性像であった。ワタクシというカタカナ表記がその姿にぴったりだったからである。

しかし最近ではこの句を読むと、世襲と利権にばかり拘泥する国会議員が浮んでくるのは筆者だけであろうか。

敵父たれ蚊取線香滅ぶとも

マット式の電気蚊取器が普及した今日、蚊取線香を目にすることが確かになくなった。「端居してただ居る父の恐ろしき（高野素十）」と言う句もあるように、昔の親父は地震・雷・火事の次に恐ろしい存在だったのであるが…

尻取りの姫よりクリスマスまで過ごす

単純に読むと、尻取りを姫から始めてみたら、クリスマスで終わったと言うだけのことにしかならないが、年頭の姫始めから年末のクリスマスまで一年を過ごすと言う裏を読むと、変に滑稽である。

露地裏を夜汽車と思ふ金魚かな

攝津幸彦の代表作のひとつ。☆露地裏 ☆夜汽車 ☆金魚 の三つの単語を並べた、ノスタルジー三本立て一挙上映みたいな句である。

ゆえに、この句を否とする俳人もいる。だが、これだけ読者の郷愁を誘う言葉を見つけて来て、見事な哀愁のある滑稽味に仕立てて見せるところが、言葉の自立をめざした、攝津の攝津たるどころであり、非凡であると思う。

金魚を自分の子ども時代に置き換えてみると、郷愁とともにクスリとさせられる句である。

八木会長も滑稽俳句術の第九回で「滑稽句は哀愁と表裏一体」と述べておられるが、筆者も同感である。ただ面白いだけの滑稽は、川柳に任せておけばよろしいのではな

いだろうか？

次回は、橋間石の滑稽句に触れてみたい。